

文芸の教育社会学的研究

— 影響パターンの分析を中心にして —

片岡徳雄（広島大学）

山崎博敏（広島大学）

島田俊郎（広島大学大学院）

○高旗浩志（広島大学大学院）

○村沢昌崇（広島大学大学院）

I 問題設定

本報告は、文学、演劇、映画、音楽、美術、彫刻などの文芸を教育社会学的に分析しようとする試みである。本報告では、とくにマクロな視点から文芸の教育社会学にアプローチした「作家の影響力に関する分析」と、ミクロな視点によるアプローチである「文芸の受容形態に関する分析」の二点について検討した。

社会学においては、とくに文学を中心として、文芸を対象とした分析が早くから行われてきた。その分析の対象は次のように大きく二つに分けられる（この分類は、作田・富永編 1984、富永 1988、片岡 1989を参考にした）。

まず第一は「文芸についての社会学」である。この領域はEscarpit(1958)が文学において行ったように、文芸の生産、分配、消費という三つの側面に分けられる。

第二は「文芸作品の内容分析」である。これには、文芸作品の内容を分析することにより、社会学理論を再確認する「文芸をととしての社会学」と、文芸の内容分析により新しい社会学理論を構築しようとする「文芸からの社会学」の二つの領域がある。

教育研究において文芸を対象とした分析がさかんに行われてきた領域は、国語科や美術科、音楽科などの教科教育であった。しかし、それらにおいては、教材としての文芸作品の内容分析が中心であり、文芸に対する社会学

的な視点はそれほど重視されてきていない。

最近になって、教育社会学においても文芸への関心は急速に高まってきた。実際に、文芸作品を教育社会学的視点から分析したもの（片岡編 1987、片岡 1989aなど）をはじめ、文芸エリートの属性を分析した山内(1990)や、婦人雑誌の内容を分析し、近代日本における女性像の変化を明らかにした木村(1989)などの業績もあげられている。また、Bourdieu(1979)は、文芸の受容形態と社会的地位との関係を検討し、その試みは宮島・藤田編(1991)に見られるように日本においても行われている。

しかし、「文芸がどのような教育的・感化的な過程をみせているか、に直結する分析」の「研究課題は多くのこされて」(片岡 1989b)おり、教育社会学においては文芸に関する研究が十分になされているとは言えない。そのため文芸の教育社会学を体系的にまとめる試みは重要であると考えられる。

我が研究グループは、第41回日本教育社会学会においても「文芸の人間形成力に関する研究」として、「文学に関するアンケート」と「歌唱の影響力に関する分析」を報告し、その一部は野村他(1991)として発表している。本報告では、その結果をもとに、文芸への教育社会学的アプローチの端緒として「文芸についての社会学」に注目し、マクロな視点による「作家の影響力に関する分析」とミクロな視点による「文芸作品の受容形態に関する

分析」という二つの視点から文芸についての教育社会学的分析を行うこととした。

II 分析の方法と分析結果の概略

1 作家の影響力に関する分析

本分析においては、対象を日本における近現代の文学に絞り、「文芸についての社会学」における生産、分配、消費の三つの側面について、その関係を明らかにすることを目的としている。これら三つの側面は、それぞれが単独で機能しているのではなく、相互に影響しあっている。そのため、これらは個別に扱うのみでなく、それぞれの相互作用をも考慮に入れなければならない。そこで、本分析では、まず、小説の生産者である作家およびその諸作品に焦点を当て、それが、どのように分配され、消費されているか、あるいは、分配媒体や消費媒体により作家の分配や消費がどのように異なっているかを明らかにする。そして、次に、生産、分配、消費という三つの側面の相互作用について検討する。

作品の生産者である作家は、中村（1954、1968）や日本近代文学館編（1984）などを参考にし、時代や文芸思想が偏らないように300名を抽出した。これら各作家、およびその諸作品の分配状況および消費状況について分析す

るため、それぞれについていくつかの項目をおおまかに設定した。これらの各項目に該当する資料は既存の書誌や調査などにより収集した。資料は各項目についてできるだけ複数、多時点のものを収集するように努めた。項目、資料の一部を示せば表1のようになる。

表2には、表1に示した各項目について、上位10位までの作家を示した。この結果によれば文芸事典・百科事典への掲載量、研究者数では、すでに評価の定まった過去の作家が上位を占め、出版点数、読書世論調査では、いわゆるベストセラー作家が上位に現れている。また、雑誌記事として掲載されることの多い作家は、文学の生産以外の領域でも活躍している者であることがわかる。

表1 分析した項目と資料の一部

分配	A. 出版状況、雑誌掲載量 ①『日本書籍総目録』日本書籍出版協会 1988
	B. 全集集録作品数 C. 学校への分配 ②『中学校国語教科書内容索引 昭和24-61年度』 D. 海外への分配 ③『欧米語訳現代日本文学書目』 Kodansha International LTD. 1979
消費	A. 文学研究 ④『新潮日本文学辞典』新潮社、1988 ⑤『ブリタニカ国際大百科事典』TBS-BRITANNICA、1975 ⑥『Kodansha Encyclopedia of Japan』講談社、1983 ⑦『研究者課題総覧 1990年版』 B. マスコミ ⑧『大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録』紀伊國屋書店 C. 読者 ⑨『読書世論調査』、毎日新聞社、1985-1989 ⑩作家認知に関するアンケート D. 海外

表2 各項目における上位作家

分 配					消 費				
					文 学 研 究				
出版点数 ① (点)		教科書掲載作品数 (件) ②		翻訳書数 ③ (冊)		文学事典掲載量 (行) ④		ブリタニカ百科事典 掲載量 (行) ⑤	
松本清張	335	島崎藤村	46	芥川竜之介	128	志賀直哉	397	夏目漱石	434
井上 靖	290	夏目漱石	41	川端康成	85	川端康成	386	森鷗外	428
司馬遼太郎	279	志賀直哉	37	松本清張	66	武者小路実篤	351	島崎藤村	226
笹沢左保	232	芥川竜之介	22	三島由紀夫	53	正宗白鳥	344	谷崎潤一郎	214
水上 勉	216	谷崎潤一郎	19	菊池 寛	51	島崎藤村	333	徳田秋声	182
池波正太郎	209	井上 靖	17	武者小路実篤	44	夏目漱石	330	幸田露伴	178
赤川次郎	188	武者小路実篤	17	小川未明	43	芥川竜之介	330	川端康成	172
吉川英治	188	山本有三	17	志賀直哉	42	永井荷風	324	坪内逍遙	170
遠藤周作	188	下村湖人	14	谷崎潤一郎	42	幸田露伴	319	志賀直哉	169
黒岩重吾	186	有島武郎	14	森 鷗外	40	森 鷗外	319	芥川竜之介	168
-	-	堀 辰雄	14	-	-	-	-	-	-

表2 各項目における上位作家(続き)

消費 (続 き)									
文学研究 (続 き)				マスコミ		読 者			
Kodansha百科事典 掲載量 (行) ⑥		研究者数 ⑦ (人)		雑誌記事掲載件数 (件) ⑧		読書世論調査 ⑨		認知度指数 ⑩ (%)	
三島由紀夫	426	夏目漱石	74	野坂昭如	205	司馬遼太郎	38	芥川竜之介	98.8
横光利一	297	森鷗外	42	池田満寿夫	140	松本清張	38	夏目漱石	97.7
川端康成	271	芥川竜之介	37	遠藤周作	123	吉川英治	34	吉本ばなな	96.9
谷崎潤一郎	194	島崎藤村	23	石原慎太郎	120	夏目漱石	32	太宰治	96.9
森鷗外	177	川端康成	23	向田邦子	114	渡辺淳一	27	川端康成	96.7
夏目漱石	177	志賀直哉	20	田辺聖子	106	新田次郎	26	森鷗外	95.6
井伏鱒二	153	有島武郎	19	森 遙子	105	山本周五郎	26	島崎藤村	95.2
芥川竜之介	143	横光利一	17	村松友視	105	三浦綾子	25	赤川次郎	95.2
安部公房	132	泉 鏡花	16	堺屋太一	96	井上 靖	24	志賀直哉	93.4
武者小路実篤	131	樋口一葉	14	椎名 誠	96	五木寛之	23	二葉亭四迷	93.0

各項目に付した番号は、資料番号を示す。また括弧内は単位を示す。

このうち「教科書掲載作品数」は昭和24年から昭和61年の累積、「雑誌記事掲載量」は1980年代のみの値。また「読書世論調査」とは、資料⑨に掲載された「好きな作家」に得点を与え、1985年から1989年の総計を求めたもの、「認知度指数」とはアンケートにより各作家の知名度を求めたもの。

これらの各項目について、可能なものに関して時系列による分析を行う。また、因子分析により各メディアがどのような関係にあるかを考察し、作家の影響パターンを明らかにする。

2 文芸作品の受容形態に関する分析

本分析は、文芸作品が、個々人によりどのように受容され、そしてそれが個々人にどのように影響を与えているかを考察する試行的な分析である。

文芸の教育社会学において、文芸作品が個々人に与える影響に関する分析はもっとも重要な領域である。しかし、これまでは、その重要性は認識されながらも実証的な研究はあまりなされてこなかった。

そこで我々は文芸の受容形態と文芸の影響力を明らかにするため、高校生、大学生、社会人に対するアンケートを行った。このアンケートのうち、大学生による回答の一部を分析した結果を示せば以下ようになる。

(1) 文芸との接触

文芸との接触状況を明らかにするため、

「映画館に行く」「美術館に行く」などの行為をどの程度行っているかを調査した。表3には、各人の文芸との接触状況と、各人が育った家の人の文芸などとの接触との関係を示した。この結果から「育った家の人の文芸などとの接触状況が、本人の文芸への接触状況に影響を与えていることが推測される。とくに「自分が育った家の人の文芸」が「美術館・音楽会」に行くとした者に、自分も美術館やクラシックのコンサートに行くとする者が多くなっていた。

(2) 文芸からの影響

文芸からどのような影響を受けているかを明らかにするため、「心に残っている文芸作品」があるとした者について、その文芸作品のジャンル、出会ったきっかけなどを調査した。表4にはその集計結果を示した。この結果から心に残っている文芸作品がある者は約7割であり、その多くが映画、文学であった。

これら以外の分析結果の詳細は、当日に配布する資料に譲りたい。

表3 文芸との接触における自分と「自分が育った家の人」との関係

単位：％

		自分が育った家の人											
		小説				漫画				美術館・音楽会			
		全体	読む	読まない		全体	読む	読まない		全体	行く	行かない	
自分	映画館に行く	29.4	35.0	23.9	**	29.4	38.6	26.0	**	29.4	33.2	28.1	
	テレビを見る	80.1	83.1	77.1	*	80.1	84.2	78.6		80.1	83.4	78.9	
	家で音楽を聴く	86.2	90.1	82.5	**	86.2	85.6	86.5		86.2	93.8	83.6	**
	美術館に行く	12.4	14.8	10.1		12.4	13.4	12.1		12.4	26.9	7.4	**
	小説を読む	41.0	50.5	31.7	**	41.0	41.1	41.0		41.0	48.2	38.6	*
	漫画を読む	47.7	50.3	45.2		47.7	72.3	38.6	**	47.7	45.2	48.7	
	ビデオを見る	52.0	53.8	50.3		52.0	60.9	48.7	**	52.0	54.9	51.0	
	演劇を見る	4.1	4.8	3.5		4.1	6.4	3.3		4.1	7.8	2.9	**
	クラシックのコンサートに行く	11.4	14.3	8.5	*	11.4	15.8	9.7	*	11.4	28.5	5.4	**
	ロック・フォークコンサートに行く	16.8	21.0	12.8	**	16.8	23.3	14.5	**	16.8	22.3	15.0	*

表中の数字は、各行為を自分がよくするとした者の割合。

**は1％、*は5％で有意な差があることを示す。

表4 文芸からの影響に関する集計結果

単位：人、()内は％

文芸作品に感銘を受けたことがあるか	はい	いいえ	計	
	509(70.3)	215(29.7)	724(100.0)	
感銘した文芸作品の種類	文学	音楽	漫画	絵画
	151(36.4)	46(11.1)	12(2.9)	6(1.4)
	映画	テレビ	その他	計
	167(40.2)	22(5.3)	11(2.7)	415(100.0)
文芸作品が心に残った理由	表現・技法にうたれた	生き方に影響した	その他	計
	223(46.9)	145(30.5)	107(22.5)	475(100.0)
	学校の勉強	先生の勧め	友人の勧め	親兄弟の勧め
感銘した文芸作品を知ったきっかけ	20(4.3)	35(7.4)	82(17.4)	33(7.0)
	テレビ・雑誌などで	特になし	その他	計
	155(33.0)	71(15.1)	74(15.7)	470(100.0)

参考文献

- 富永茂樹 1988 「文学社会学」 見田・栗原・田中編『社会学事典』弘文堂。
- 片岡徳雄・高萩保治 1985 『情操の教育』放送大学教育振興会。
- 中村光夫 1954 『日本の近代小説』岩波書店。
- 片岡徳雄編著 1987 『教科書の社会学的研究』福村出版。—— 1968 『日本の現代小説』岩波書店。
- 野村幸治・藤埴智一・山田浩之 1991 「『思い出のうた』形成過程の分析」『季刊音楽教育研究』第34巻第2号。
- 片岡徳雄 1989a 『日本人の親子像』東洋館出版社。
- 宮島喬・藤田英典編 1991 『文化と社会』有信堂。
- 1989b 「マスコミと文芸」片岡徳雄編『教育社会学』福村出版。
- 山内乾史 1990 「近代日本における文芸エリートの社会学的考察」日本教育社会学会編『教社研』第47集、東洋館出版社。
- 1990 『子どもの感性を育む』日本放送出版協会。
- Bourdieu, P. 1979 『ディスタンクシオン』(I・II)(石井洋二郎訳 1990 藤原書店)。
- 木村涼子 1989 「婦人雑誌にみる新しい女性像の登場とその変容」『教育学研究』第56巻第4号。
- Escarpit, R. 1958 『文学の社会学』(大塚幸男訳 1959 白水社)。
- 作田啓一・富永茂樹編 1984 『自尊と懐疑』筑摩書房。